

巻頭言

本年度も文部科学省の学力・学習状況調査が実施されその結果が公表された。各自治体が順位づけられ、このランキングの変動に一喜一憂している最近の現状に大きな違和感がある。本来この調査の目的は、各学校が自校の課題を発見し指導の改善を図ることであつたはずである。しかし、今、それが学校を取り巻く周囲の環境によって大きく変わってきてしまっているように感じる。少しでも高い点数を取れるようにし、ランキング上位を目指すことがクローズアップされ、どのように知識・技能を習得させるか、どのように活用力を培うかという指導論は大きな話題にならない。そんな折、民放のテレビ局が岡山県内のある自治体の学力向上に向けての取り組みを紹介していた。その中で、本会の黒崎会長がインタビューに答えられて「学力向上に万能の方策はない。地道な取り組みが求められる」と話されていたのが印象に残った。

思考すること、表現することは一人一人の人間が自ら営むことであり、教師が力づくで子どもに思考させたり表現させたりすることなどできない。では、思考力や表現力はどのようにして育てるのであろうか。ある学校の算数の授業を拝見したときのことである。「倍数・最小公倍数」の学習を終えなかったそのとき、一人の子どもが小さく呟いた。「最小公倍数があるのに最大公倍数はないのかな・・・」先生には聞こえなかったかもしれない。或いは、聞いても聞かなかった振りをしたのかもしれない。また、この子は、このことを誰かに教えてもらいたかったのかもしれない。或いは、自問自答していたのかもしれない。結局この声は、「あー、やっと終わった。ドッジしようぜ。」という他の子どもの声にかき消されてしまい、誰にも取り上げられることはなかった。

大人にとってみれば「最大公倍数」なんてものがないことは当たり前のことかもしれない。しかし、新しい学習内容に直面し続けている子どもにとってはすべてが新鮮でまた疑問だらけなのである。このかき消された問いには、数のおもしろさが秘められている。また、知りたいという思いが込められている。「最小公倍数があるのに最大公倍数はないのかな・・・」この呟きを取り上げてやることができたなら、子どもの思考を誘発し、公倍数の意味、整数の意味を深めることにつながったはずである。何気ない子どもの呟きの価値を見抜くことこそ教師の力量である。そして、この教師の力量を高めながら、地道に子どもと向き合っていくことが学力向上につながる道だと考える。

教師の力量は、理論と実践の融合を図ろうと努力を積み重ねる中で培われる。岡山大学算数・数学教育学会はそれを手助けしてくれる絶好の場だと考えている。

平成26年9月30日

岡山市立福島小学校校長

(前 岡山大学大学院 准教授)

福田 博 雅